書　評

千葉御茶屋御殿跡調査会　執筆編集：
『千葉御茶屋御殿跡　第3次調査概報』
千葉市教育委員会　1991年
B5判　本文22ページ，図版10ページ

さきに評者は遠州新居の御殿跡についての発掘報告書を紹介した（本誌128号，1985年）が，今回千葉の御殿についての報告書を御寄贈頂いたので紹介することにする。

千葉の御茶屋御殿跡は千葉市御殿町に所在する。徳川家康はしばしば東金に鷹狩りに通い，そのため佐倉街道の船橋から東金まで直線状のお成り街道を設け，起終点である船橋と東金，それにほぼ中間地点であるこの地に御殿を設けたのである。建物こそ残らないものの，四周の土塁と堀がほぼ完全に残っているのは全国の御殿でも稀有のことで，千葉市はその重要性を認識して，遺跡の全域を公有化して保全につとめている。

本書は1990年10～12月に実施された第3次調査の報告書である。千葉市教育委員会の委託を受けた千葉御茶屋御殿跡調査会（代表・岡田茂弘氏）が調査と執筆編集に当たった。メンバーは調査委員として岡田茂弘，吉岡康暢，千田嘉博（以上，国立歴史民俗博物館），菊池真太郎（千葉県立房総の村），柴田竜司（千葉県文化財センター）の諸氏，それに調査補助員として学習院大学輔仁会史学部員28人の方々が加わる。10人の分担執筆であるが，他の人の執筆分もふくめて「文責は岡田茂弘にある」とのことである。

本書は，1. 立地と環境　2. 文献資料による千葉御茶屋御殿　3. 調査の経過　4. 遺構と遺物　5. 考察，の5章から成る。

出土遺物として陶磁器，瓦，釘，煙管の雁首，かんざしなどがあるが少数であり，別に，より古い時代の遺物として縄文土器，石器，須恵器も出土している。

遺構としては建物の基壇跡2カ所，掘立柱列2カ所，土壙などが発見され，土塁の構造も検討されている。

郭内には少なくとも2カ所の建物が存在したことが判明し，その一つは御殿施設に伴うものと考えられ，「中央の広間の西に御殿，東南に家臣の居間，北に台所等の施設が存在した」と推定されて，西南方には庭園の存在も考えられている。掘立柱列から郭内を間仕切るための施設（柵または塀）の存在も指摘されている。

今回の調査では出土遺物は少なく，報告の重点は遺構の検討に当てられている。さきに紹介した新居御殿跡の報告書では遺構は少なく，陶磁器など豊富な出土遺物の検討に重点をおかれているのと対照的である。図版の方も本書では10ページ中9ページが遺構，1ページが遺物なのに対し，新居の報告書では12ページ中2ページが遺構，10ページが遺物と，これまた対照的である。ともに御殿という同様の施設の遺跡でありながら陶磁器などの出土量に大差のある理由について，専門家の御意見を伺いたいところである。

今回の報告書は第3次調査の報告書で，前に第1次，第2次の調査がなされ報告書がでていたのだが，評者は知らなかった。第1次では測量を主として発掘はされなかったが，第2次では発掘調査がなされている（1974年）。これは新居御殿跡の発掘調査（1983年）より早い。したがって，さきの紹介文において，新居の場合を御殿跡についての発掘調査のさきがけと見ていたのは誤りなので，ここで訂正しておきたい。

なお，新居の場合の報告書では千葉の第1次，第2次の報告書を参照されず，今回の報告書では新居についての報告書は参照されていない。他地方の事例との比較検討がなされれば，より実りある成果が得られたことと思われる。せっかくの貴重な研究報文が学界の共通財産として活用されていないことは残念である。

発掘報告書ではないが，千葉御茶屋御殿に関係深い東金御成道については，本保弘文著『お成り街道，家康鷹狩り道，私家版』（1986年）という好文献があることを付記しておく。

（中島義一）